

■靖国神社とA級戦犯

河野 信

はじめに

小泉内閣になってから、日中、日韓関係が極端に悪化しました。その原因として、中国の愛国主義教育、竹島、尖閣諸島の領土問題、これに付随した漁業権と資源問題、歴史教科書問題などがありますが、小泉首相が所謂A級戦犯を祀る靖国神社に、総理大臣として参拝することがが関係悪化の最大原因であると考えられます。

中曽根康弘首相が85年に公式参拝した後16年間、歴代の9名の首相は橋本龍太郎首相以外は参拝を差し控えてきました。この間、日中、日韓関係は今ほど険悪にはなっていませんでした。関係悪化は小泉首相の靖国参拝が最大の引き金であることは間違いありません。6/20ソウルで行われた日韓首脳会談にも以前ほどの友好ムードはなかったようです。

今後、東アジアはどうなってゆくのでしょうか。北朝鮮の核問題、拉致問題もあります。日本はただアメリカにだけ縋っていれば良いのでしょうか。アジアがこんなに不安定で良いのでしょうか。我々は主体的に日本の進むべき道を考えるべきであります。徒に中国や韓国の政府に善処を一方的に要求すべきものではありません。

私たちは、日中、日韓の関係悪化の有力な原因である靖国参拝と、そこに合祀されている所謂A級戦犯について、しっかりした自分なりの意見を持つ必要があるように思うのです。以下大戦参加者の一員として愚見を申し上げます。

靖国神社の成り立ち

靖国神社はそもそも、国のために戦死した英霊を祀るために創建された神社です。これは明治政府が造った「国家神道」の考えに立脚しています。靖国神社は、伊勢神宮、熱田神宮、出雲大社など、明治以前に創建された日本古来の神社とは成り立ちが全く違います。

「靖国」とは「国を靖（安）らかにする」ことを意味しています。「祭神」は戦死や戦傷病死した軍人・軍属と、それに準じる「国家のための戦いで死んだ人」です。この意味から言って、西郷隆盛や乃木大将や東郷元帥は祀られていません。然し東京大空襲や沖縄、広島、長崎の犠牲者が祀られていないのはどういうわけなのでしょう。

靖国神社の真のご祭神 兵隊は神様だ

石原莞爾は兵士を大事にする将校でした。彼は明治42年少尉任官と同時に、会津若松の歩兵第65連隊付になり「私の一生中で最も愉快的年月を、陸軍大学入学まで過ごし」たのです。（『戦争史大観』1941）

「会津の数年間に於ける猛訓練、殊に銃剣術は今でも思いでの種である。この猛訓練によって養われて来たものは兵に対する敬愛の念であり、心を悩ますものは、この一身を君国に捧げている神の如き兵に、いかにしてその精神の原動力たるべき国体に関する信念感激をたたき込むかであった」（『前掲書』）

この神の如き兵が、靖国神社の真のご祭神なのです。

石原莞爾は昭和13年東条英機らの策謀によって、関東軍参謀副長から舞鶴要塞司令官に左遷させられました。司令官は地元の戦死者慰霊祭に参列し、弔詞を読むことになっていました。

「副官が、いろいろと弔詞を書いてくれるのだが、読んでみると、名誉の戦死だとか何だとか、しらじらしい言葉が並んでいるので、どうも気が咎めて、どうしても読めない。仕方がないから、そのまま読まずに、霊前において帰ってくる。許してくれと、私は心の中でわびるが、遺族たちの顔を見ると気の毒でたまらない。これが一番つらい」（山口重次『悲劇の将軍石原莞爾』大湊書房 1975）

大戦中、一兵士の死をこれ程悼む将軍がいた反面、自己の栄達を謀るために無理な作戦を強行した司令官も多くいました。特に牟田口廉也中将などは、東条首相の認可を受けて、大戦中最も悲惨なインパール作戦を強行し、3ヶ師団、約7万人もの戦死傷者を出したのです。

戦争を命じた者と、命じられて死んだ者とを同列に取り扱うことはスジが違います。

私の体験

私は大学卒業直後、熊谷陸軍飛行学校に入隊を命ぜられました。即ち、我々は死ぬことを命ぜられたも同然でした。今日生きているのは奇跡としか言いようがありません。

私は何回か生き残った戦友とともに、靖国神社に昇殿参拝しました。その度ごとに空戦、事故、特攻などで死んだ戦友の顔が浮かび上がります。その時はA級戦犯が合祀されている

ことなど、全く念頭にありません。多くの遺族、戦友が靖国神社にお詣りするのは極く素直な人間的感情から出たものです。

小泉さんのように「世界平和を祈る」など、心の余裕は全くありません。ただ亡き戦友のことを想うことで精一杯なのです。

所謂A級戦犯について

東京裁判は、インドのパール判事の指摘のとおり、「勝者が敗者を裁く」という国際法にない不当な裁判です。然し、敗戦日本国はこの裁判を認め、やっとならばと連合軍との戦争状態を正式に終結することが出来たことも歴史上の厳然たる事実です。

戦後60年も経って「東京裁判は無効だ、A級戦犯には罪がない。当然靖国神社に祀られるべきだ」と言う人が現われました。であるならばこの人々は、裁判終結直後から直ちに「東京裁判無効」の国民運動を起こすべきでした。占領軍がいる間は一言半句の反対意見も言わずに、今になって騒ぎ出すのは卑怯です。

靖国神社の態度にも疑問が残ります。靖国神社の祭神は本来「国家のための戦いで死んだ人」であった筈なのに、戦後33年も経ってからA級戦犯を「昭和殉難者」として合祀したのです。A級戦犯が「殉難者」とするならば、東京大空襲、沖縄、広島、長崎等の「犠牲者」が「殉難者」でないはずはありません。

A級戦犯は＜戦場＞で戦死したわけではありません。彼らの大部分は、中国に大兵を送り、勝つ見込みのない戦争を始め、300万の兵士を戦場で死なせました。死ぬことを命じた者と、命じられた者を同列に扱うのは間違っています。

無謀な戦争を始め、無謀な戦闘を命じたA級戦犯は、若くして死んだ兵士の無念さを判っているのでしょうか。彼らは特攻で死んだ飛行機乗り全員が、喜んで死んだと思っているのでしょうか。

我々の戦友は苦しんで苦しんで自分を納得させ、「大義」のために身を捧げたのです。九州の知覧は陸軍特攻の最大基地でした。今知覧には「特攻観音」が祀られ、戦死者の遺影、遺言が展示されています。あの遺言を書くまでの心の葛藤を偲んで貰いたいのです。

所謂A級戦犯を靖国神社の祭神から外す（分祀）の意見が出た時、東条家の人々だけがこの分祀に反対したということです。

天皇陛下と靖国神社

靖国神社はA級戦犯を66年に「祭神名票」に載せ、70年に「崇敬者総代会」に合祀を

諮り了承されました。合祀が実行されたのは、78年10月17日、合祀の事実が公表されたのは79年4月でした。

昭和天皇は、終戦の年1945年11月20日以来、合計8回靖国神社に参拝されました。然し75年11月21日のご参拝を最後に、以後今日まで30年間、一度も天皇のご参拝はありません。タイミングから見て、A級戦犯の合祀がご参拝の大きな妨げとなっているのは間違いありません。

小泉首相は天皇陛下が参拝を控えておられる靖国神社に、何故参拝を強行するのでしょうか。明治以来の「忠君愛国」の信条から見れば、天皇の意に逆らった小泉首相の参拝は正に「不忠」の極みであります。

憲法によれば、天皇は「日本国民統合の象徴」であります。その「国民統合の象徴」である天皇が参拝を控えておられるのに、行政府の代表が何故参拝を強行するのでしょうか。小泉首相は、靖国詣での理由を天皇陛下にどう説明しているのでしょうか。

おわりに

今の日本は戦争の本当の痛みを知らない人が、戦争を論じているような気がします。かつては自らは安全な処にいて、無謀な戦争を始め、戦闘を指揮した人が国を誤りました。小泉さんたちは、開戦を阻止しようと懸命な努力をした人がいたことを知っているのでしょうか。靖国神社の真の祭神は誰なのか知っているのでしょうか。

今こそ開戦は歴史的必然であるのか、回避する道はなかったのか、史実に基づいて検証すべきであります。

今月の『文芸春秋』は「小泉総理<靖国参拝>是か非か」という特集を組み、識者81名からアンケートをとりました。なかなか読み応えのある特集でした。

その中で軍事アナリストの小川和久さんが

「(小泉さんは) 無宗教の施設に参拝すべきであり、A級戦犯の呼称は、日本国民による戦争責任追及の結果ではないので、<いわゆるA級戦犯>とする」と提言していました。大賛成です。

これを機会に、一人でも多くの市民が昭和史を真剣に、虚心に読み直して下さることを熱望します。

(なお所謂A級戦犯については、開戦の責任について一人一人の関与の度合いを再精査する必要があります。7人の処刑判決は果たして公平であったかどうか、疑問が残っています)